

第1表 巻別の季の数

| | 春 | 夏 | 秋 | 冬 | 雑 |
|--------|----|---|----|----|----|
| こがらし | 5 | 1 | 10 | 5 | 15 |
| はつ雪 | 9 | 2 | 6 | 3 | 16 |
| 霽 | 9 | 2 | 7 | 4 | 14 |
| 炭 賣 | 6 | 1 | 10 | 6 | 13 |
| 霜 月 | 9 | 3 | 7 | 4 | 13 |
| 計 | 38 | 9 | 40 | 22 | 71 |
| 追加(6句) | — | — | 3 | 2 | 1 |

(—:該当無し)

以下、大気現象にこだわって巻ごとにいささかの分析を試みる。最後に、作者別・季別・長短句別等に大気現象のつかわれ方について集計する。巻の呼び方、季については中村(1962)に従う。ただし、追加の季は白石、上野(1990)によった。

各巻及び追加における季の数は第1表に示すとおりである。全体平均して4割弱が雑句である。秋、春が2割前後と多く、冬はその半分、夏はさらにその半分である。

3. 具体例

本節では巻ごとに大気現象が表れる句を順番に考察する。まず、大気現象を含む句とその前後の句を示す。番号は発句からの順番であり、したがって長句は奇数、短句が偶数となる。大気現象に を付し、その句の季を[]、作者を()に示す。季については、春; F, 夏; S, 秋; H, 冬; Wの記号を用いた。雑句はZで表した。また、下線を付した大気現象が季語となっている場合、季節の記号にさらに*を付す。使用する漢字の自体は原則としてJIS第2水準までとする。反復記号は々々で置き換えた。その他目読してイメージを把むのに、最低必要と思われるふりがなを付すことにする。

次いで、一つ一つの大気現象についてその句における使われ方、前・後句との関連を検討する。

これに際し、句の解釈に類することも述べるが、大気現象にこだわる部分以外は、中村(1962)、白石・上野(1990)、安東(1981, 1986, 1989, 1990)によった。また、検討に際しての記述では、原文の表記に拘らず、現在見慣れている表記を用いる。

3.1 こがらしの巻

1. 狂句 こがらし の身は竹齊に似たる哉

[W*](芭蕉)

2. たそやとぼしかさの山茶花 [W](野水)
白らを仮名草子の主人公である社会的脱落者になぞらえ、その状態を象徴するものとして「木枯し」を用いた芭蕉に対し、野水が「木枯し」で飛び散った山茶花が笠に降りかかる様子を捉えて応えたものである。「木枯し」の第1句における役割、第2句との関連における役割いずれもきわめて重要である。

3. 有明の主水に酒屋つくらせて [H](荷兮)

4. かしらの 露 をふるふあかむま

[H*](重五)

5. 朝鮮のはそりすゝきのにほひなき

[H](杜国)

第4句における「露」は赤馬が頭を振る際の一つの小道具にすぎない。前句とは有明月から朝「露」、後句とは「露」からすすきという、連歌以来の常套的関連である。

10. きえぬそとばにすご々々となく

[Z](荷兮)

11. 影法のあかつき さむく 火を焼て

[W*](芭蕉)

12. あるじはひんにたえし^{カライユ}虚家 [Z](杜国)

第11句における「寒く」は早朝の低温を確認している。前・後句との関連は「卒塔婆」、「貧」ともその印象は少なくとも暖かくはないとして了解できる。

13. 田中なるこまんが柳落るころ[H](荷兮)

14. 霧 にふね引人はちんばか [H*](野水)

15. たそかれを横にながむる月ほそし

[H](杜国)

舟を曳く人の様子を「霧」を通してみれば、歩

行困難者の様に見えるという第14句は、「霧」による視程の低下を意味する。柳すなわち川辺から「霧」, 「霧」から月を連想することは、古くから行われている。しかし、後句において、黄昏時に見える月は地平線に近い三日月のはずであり、現在の気象学の定義（水平視程1km未満）の「霧」が出ていれば見えないはずである。当時はこれほど視程が下がらない場合でも「霧」としていたことが推定される。

22. しばし宗祇の名を付けし水 [Z] (杜国)

23. 笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨
[W*] (荷兮)

24. 冬がれわけてひとり唐苳 [W] (野水)

「北時雨」に取えて濡れるという第23句は、一つの行為を描写しただけであるが、前句との関連において、時雨に関する作品で知られている宗祇に関心を持つ風狂人の行為という意味になる。後句との関連は、冬の景色として冬枯れの唐苳を出している。

本巻に出て来る大気現象は5つあり、いずれも季語となっている。

風に関するもの：こがらし、降水現象：露、霧、北時雨、気温表現：さむく。

3.2 はつ雪の巻

1. はつ雪 のことしも袴きてかえる
[W*] (野水)

2. 霜 にまだ見る 薺 の食 [W*] (杜国)

3. 野菊までたづぬる蝶の羽おれて
[H] (芭蕉)

第1句の人物は、人それぞれが何等かの思いを持ってむかえている「初雪」の日にも、袴をはいて通常の勤務の後に帰宅するだけである。その人物は、朝顔が咲く時刻には朝食をとって出勤しなければならない(第2句)が、その朝顔も、季節はずれで「霜」が降る时候になってもまだ咲いているような哀れな朝顔である。ただし、霜が降りる時期に咲く朝顔があるのか、現在の常識からは異常に早く霜が降りたのかいづれかは解らない。第1句と第2句は冬の気象現象で関連付けられ、第2句と第3句は哀れさで関連する。

6. 桃花をたをる貞徳の富 [F] (正平)

7. 雨 こゆる浅香の田螺ほりうえて
[F] (杜国)

8. 奥のきさらぎを只なきになく [F] (野水)

第7句の「雨」は浅ないしは浅香にかかる枕詞的なものということであり、したがって前・後句との関連においても「雨」は特に役割を果たしていないので、大気現象としては考察の対象ではない。

本巻に出て来る大気現象は3つで、いずれも降水現象(はつ雪、霜、雨)であるが、うち雨は季語でもなく重要さは欠ける。

3.3 露の巻

1. つゝみかねて月とり落とす霧かな
[W*] (杜国)

2. こほりふみ行水のいなづま [W] (重五)

3. 齒朶の葉を初狩人の矢に負て
[F] (野水)

第1句では「時雨」という天候の特徴、積雲が断続的に近付き一時的な雨をもたらすかと思えば雲が切れるという状態を、雲間から見え隠れるる月でとらえている。第2句の「いなづま」については、水溜りの氷を踏み割ると「いなづま!」のような割れ目が走る、という解釈がなされている。「いなづま」の素早さにおいて「時雨」の始まり方と関連させるのであるが、「時雨」をもたらす積雲に雷が発生し電光を実際に見たということも有り得ないことではない。冬の季節風時上空に強い寒気が侵入して発達した積雲中に雷が発生することは通常のことである。「時雨」程度の積雲でも雷が起こることは現在の気候では想像し難いが、気候が全般的に寒冷で、寒気が強ければ可能かも知れない。第3句は、狩人が初獵にでかける時の風景である。この場合は、水溜りの氷を踏み割るのは明るい時間であり、雷雨時に狩に出ることも考えにくいので、「いなづま」は氷の割れ方とするほうが素直であろう。

4. 北の御門をおしあけのはる [F] (芭蕉)

5. 馬糞搔あぶぎに風の打ちかすみ
[F*] (荷兮)

6. 茶の湯者おしむ野べの蒲公英

[F] (正平)

春「風」と「かすみ」の日に馬糞を掻き取っているのが第5句である、季語は「かすみ」。馬糞は第4句で押し開けた門の前のあり、他方第6句はそのような日、春の野辺では茶の湯を楽しんでいるということである。「風」は季語でもなく、その役割は決定的とは思えない。

8. 燈籠ふたつになさけくらぶる

[H] (杜国)

9. つゆ秋のすまふ力を撰ばれず

[H*] (芭蕉)

10. 蕎麥さえ青し滋賀楽の坊 [H] (野水)

萩に「露」が溜っており、「露」の重さと萩の枝の反発力が釣り合っている状態をとらえたのが第9句である。前句との関連は二つのものの比較ということにあり、後句との関連は、全体としての季節感覚である。なお、「露」が溜る程度で枝が撓り萩はミヤギノハギであり、ヤマハギではなからう。

23. 捨し子は柴刈長にのびつらん [Z] (野水)

24. 晦日をさむく刀賣る年 [W*] (重五)

25. 雪の狂呉の国の笠めづらしき

[W*] (荷兮)

26. 襟に高雄が片袖をとく [Z] (芭蕉)

第24句の「寒く」は、刀を売らねば歳も越せぬ窮乏生活をあらわし、第25句は「雪」に興じて珍しい外国の笠をかぶっているということである。両句の関連は、そういう客を迎えるためには刀を売らねばならぬ、あるいは、刀を売らねばならぬ時世には呉の笠をかぶったりする変わり者も居るという解釈があるが、いずれも大気現象の観点からは「寒さ」すなわち「雪」の単純な対応の上に成立している。第24句と前句は、子捨てと刀を売る窮乏生活が関連し、第25句と後句は酔狂な人物の行動として関連が付く。

本巻に出て来る大気現象は6句7つあり、うち5つ、降水現象：霽、露、雪、天候現象：かすみ、気温表現：さむく、が季語となっている。風、いなづま（大気電気）は季語ではない。

なお、本巻の第15句に『津波』があり、これに

中村（1962）は『高潮』と注記しているのでこれに関連し筆者の見解を述べる。まず当該句と前・後句を示す。

14. 命婦の君より米なんどこす [Z] (重五)

15. まがきまで津波の水にくづれ行

[Z] (荷兮)

16. 佛食たる魚解きけり [Z] (芭蕉)

第15句は海岸から多少は離れている住居の垣根まで壊すような『津波』があったという句である。現在、『津波』は地震等による急激な力による大きな波、『高潮』は台風ともなう風のように持続的に働く力による大きな波を指すが、この区別が明確になされたのは最近50年程度で比較的新しい。本来、『津波（港における波）』にはその原因を意味する成分はなく、沖合では波高は目立たないが波長の長い波が、陸に近付くと海底が浅くなるため、さらに港湾部では地形的に、振幅を増すこと指す言葉である。その場合原因を特定する必要があれば『地震津波』、『(暴)風津波』とした。

前句とは、宮中の女官がおくってきた米を救恤米と解釈して関連付けているので、これによって地震津波、暴風津波の判断はできない。他方、後句との関連は、『津波』で打ち上げられた魚の腹を割いてみたら仏が出てきたということである。台風による高潮で魚が打ち上げられることが全く無いとはいえないが、ここは魚も死ぬような急激な力による地震津波と解釈の方が自然である。そこで、理科年表の1990年版の「日本付近のおもな被害地震年代表」により、芭蕉の生年、正保元年（1644年）から本巻成立の貞享元年（1684年）の間にあった津波をともなった地震をあげると、寛文二年（1662年）日向灘、同四年（1664年）琉球にあったが、いずれも遠隔地で時間も離れている。延宝五年（1677年）の春と秋に2回あり、前者は陸中、後者は磐城から房総にかけて津波が襲っており、荷兮や芭蕉がこれを記憶していたと考えることは無理ではなからう。なお、理科年表1987年版までの「日本付近の被害地震年代表」では、この津波は尾張まで及んだと記述されていた。

以上により、第15句の『津波』は、後句との関連では地震津波と解すべきである。連句の場合、前句との関連、後句との関連は異なることが前提であるが、前句との関連を風津波で付け、後句と

は地震津波で付けわけるといふところまで及ぶほどのものか、また当時そこまで津波の原因を意識していたかは、筆者の連句の理解の程度では解らない。

3.4 春賣の巻

1. 炭賣のをのがつまこそ黒からめ [W] (重五)
2. ひとの粧ひを鏡磨寒 [W*] (荷兮)
3. 花^{イバラ}森馬骨の霜に咲かえり [W*] (杜国)
4. 鶴見るまどの月かすかなり [H] (野水)
5. かぜ吹かぬ秋の口瓶に酒なき日 [H] (芭蕉)
6. 萩織るかさを市に振りする [H] (羽笠)

第2句では、他人が化粧するための鏡を「寒」さの中で磨いている。この寒い情景は、第3句の「霜」の降りた馬の白骨のように咲く、あるいは白骨の脇に咲くイバラの花でさらに強められる。第1句と第2句は、寒中大変な仕事で関連させるが、女性の化粧ということによっても関連するのではなからうか。第3句と第4句は「霜」の降りる明け方、微かな月光で鶴を見るということである。

第5句は「風」も無い穏やかな秋の日、酒を飲もうと思ったら既に無かった、ということである、季語は秋。前句とは退屈な時の様子、後句とは酒が切れたので萩の筥を市で売って酒代を得ようということ、で、「風」は直接関連しない。

14. 血刀かくす月の暗きに [H] (荷兮)
 15. 霧下りて本郷の鐘七つきく [H*] (杜国)
 16. ふゆまつ納豆たゝくなるべし [H] (野水)
- 前句の暗さから、第15句を秋の明け方七ツ（午前4時）の頃に「霧」が出ている場合の暗さとする解釈がなされているが、秋の七ツであれば「霧」が出ていなくても十分暗いのではないだろうか。ただし、後句との関連では秋の明け方の「霧」と解釈する方が妥当である。
33. 粥すゝるあかつき花にかしこまり [F] (野水)
 34. 狩衣の下に鎧ふ春風 [F*] (芭蕉)
 35. 北のかたなく々々簾おしやりて

[Z] (羽笠)

36. ねられぬ夢を責るむら雨 [Z] (杜国)

第34句は、狩衣が「春風」にあおられたら下の鎧が見えた、ということであり、前句の花の下でかきこまるのを出陣の風景としている。後句は出陣を見送る夫人の姿であり、「春風」は特に重要ではない。第36句は「村雨」が耳について眠れない夜であるが、眠れぬ真の理由は前句の動作をさせた何事かによって由来する。

本巻に出て来る大気現象は6つある。風に関するもの：かぜ、春風、降水現象：霜、霧、むら雨、気温表現：寒。このうち、かぜ、むら雨は季語ではない。

なお、以下に示す第30句の雲は、前句から明らかなように鍛冶場からの煙であり、後句は鍛冶の多い奈良の様子であるので大気現象ではない。

29. 寅の日の旦を鍛冶の急起きて [Z] (芭蕉)
30. 雲かうばしき南京の地 [Z] (羽笠)
31. いがきして誰ともしらぬ人の像 [Z] (荷兮)

3.5 霜月の巻

7. 秋のころ旅の御連歌いとかりに [H] (芭蕉)
8. 漸くはれて富士みゆる寺 [Z] (荷兮)
9. 寂として椿の花の落る音 [F] (杜国)
10. 茶に糸遊をそむる風の香 [F*] (重五)
11. 雉追に烏帽子の女五三十 [F] (野水)

秋に旅の途中連歌を試みている前句に対し、到着した寺からやっと雨が上がって「晴れ」た空に富士山が見えたのが第8句である。後句はその寺の静かさを椿の花が落ちる音が聞こえることで示した。当時の旅は数日はかかったはずであり、その間の悪天がやっと晴れるというのは秋であれば秋霖ということになる。

第10句、春の風に「糸遊：かげろう」が立つとともに野点の茶の香りも漂う。前句と同じ興趣、後句はそのようなところで行われている余興。

22. 御幸に進む水のみくすり [Z] (重五)
23. ことにてる年の小角豆の花もろし [S] (野水)
24. 萱屋まばらに炭團つく白 [Z] (羽笠)

特に日照りの水不足の夏にはささげの花がもろいというのが第23句である。季語は小角豆の花であるとされているが、前句の水あたり用の(御)葉と関連するのは「照る年」である。また、後句の炭団を造る作業も乾燥した夏に行う。

27. しづかさに飯臺のぞく月の前[H] (重五)
 28. 露おくきつね風やかなしき[H*] (杜国)
 29. 釣柿に屋根ふかれたる片庇 [H] (羽笠)

第28句、「露」に濡れた狐に「風」が吹いて悲しい、季語は「露」。その狐は前句の飯台等に餌を探している。後句では、その狐のなく声が干柿が全面に吊られた山間の家に「風」に乗って聞こえる。

33. いろふかき男猫ひとつを捨てかねて [F] (杜国)
 34. 春のしらすの雪はきをよぶ [F] (重五)
 35. 水干を秀句の聖わかやかに [Z] (野水)
 36. 山茶花匂ふ笠のこがらし [W*] (羽笠)

白州に積もった「雪」をかくため人を呼ぶような第34句の人物は、前句との関連では、さかりのついた猫を処分することもできない。他方、春の白州の「雪」を若い爽やかな句聖を関連させると後句となる。

第36句はその句聖を、冒頭のこがらしの巻の発句「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」を読んだ芭蕉として、『冬の日』が終る。

本巻に出て来る大気現象は6句で8つある。このうち季語は糸遊、露、こがらしである。風に関するもの：こがらし、風(2回)、降水現象：露、雪、天候表現：はれて、てる年、糸遊。

3.6 追加

1. いかに見よと難面うしをうつ霰ツレナク アラレ [W*] (羽笠)
 2. 樽火にあぶるかれはらの松 [W] (荷兮)
 第1句は、あられが容赦なく牛に降り掛かっている。その牛の持ち主は第2句で、枯れた野原の松のたもとで火に当たっている。
 3. とくさ刈下着に髪をちやせんして [H] (重五)
 4. 槍笠に宮をやつす朝露 [H*] (杜国)

5. 銀に蛤かわん月は海 [H] (芭蕉)

第4句は「朝露」の中を槍の笠で身分を隠す貴人。前句の茶笥髪の下着姿の木賊刈も身を隠すためか。後句では、その貴人は蛤を買うのに銀貨を出す。

追加の大気現象は2つ。いずれも降雨現象：霰、朝露。

4. 作者別・季別句数等について

『冬の日』には以上見てきた通り、大気現象を含む句は28句(うち追加2句)ある。このうち3句には2つの大気現象がでてくるが、いずれも季語の他に「風」が使われている場合である。そのら31を、降水現象、風に関するもの、天候現象等(大気電気はここに含める)、気温表現に分類し、季語であったかどうかを区別して示すと第2表となる。

圧倒的に降水現象が多く7種16回、風に関するものは3種7回、天候現象は5種5回がそれに続く。気温表現は1種3回と少ない。『猿蓑』の4歌仙について同じ数え方をすると、降水：6種8回、風：6種8回、天候：3種3回、気温：2種3回であるので(前報)、『冬の日』では降水現象の回数が多く、風の種類が少ないといえる。

大気現象の種類を作者別(順番は木枯しの巻における登場順)示しているのが第3表である。特に目立つのは杜国が5種8回も降雨現象を出していることである。他方芭蕉は、風に関して木枯し

第2表 『冬の日』にあらわれた大気現象

| | | |
|-----|-----|---------------------------------------|
| 降水 | 季語 | 露・朝露(4)、霧(2)、北時雨・霽(2)、雪・はつ雪(3)、霜(2)、霰 |
| | 非季語 | 雨・むら雨(2) |
| 風 | 季語 | こがらし(2)、春風 |
| | 非季語 | 風・かぜ(4) |
| 天候等 | 季語 | かすみ、糸遊 |
| | 非季語 | いなづま、はれて、てる年 |
| 気温 | 季語 | さむく・寒(3) |

(数字は使われた回数)

第3表 作者別大気現象

| 降水 | 風 | 天候等 | 気温 |
|--|---------------------------------------|--------------------------|------------|
| 芭蕉 つゆ (SG09) | こがらし (KG01) かぜ (SU05) 春風 (SU34) | | さむく (KG11) |
| 野水 霧 (KG14) はつ雪 (HY01) | | てる年 (ST23) | |
| 荷分 北時雨 (KG23) 雪 (SG25) | 風 (SG05) | かすみ (SG05) はれて (ST08) | 寒 (SU02) |
| 重五 露 (KG04) 雪 (ST34) | 風 (ST10) | いなづま (SG02) 糸遊 (ST10) | さむく (SG24) |
| 杜国 霜 (HY02, SU03) 雨 (HY07) 霧 (SG01) 霧 (SU15) むら雨 (SU36) 露 (ST28) 朝露 (SP04) | 風 (ST28) | | |
| 羽笠 霧 (SP01) | こがらし (ST36) | | |

(KG:こがらし, HY:はつ雪, SG:霧, SU:炭賣, ST:霜月, SP:追加)
(数字は発句からの順番)

と春風を出しているが、風は『冬の日』では数が少ない上、他の現象と併用されることが多いことを考えれば指摘するに値しよう。天候現象を出したのは主要メンバーの残りの3名であり、芭蕉、杜国は出していない。

第4表では、大気現象を含む句を巻別に季に分けて示し、また、それらの長短の別を示した。はつ雪の巻は3句と少ないが、他は5ないし6句が大気現象を含んでいる。季については、こがらしの巻、霧の巻で冬が多いので、5歌仙全体としても冬が多い。第1表と比較すると、冬の句の半分以上に大気現象がある(うち10句は季語)のに対し、他の季では1~2割、雑句では3%程度である。この傾向は『猿蓑』とほぼ同じである。なお、長短の別は、霧の巻で長句、霜月の巻で短句に偏るが、全体としては13句づつとなった。追加

第4表 巻別、季別の大気現象を含む句及びそれらの長短の数

| | 春 | 夏 | 秋 | 冬 | 雑 | 長 | 短 |
|--------|---|---|---|----|---|----|----|
| こがらし | - | - | 2 | 3 | - | 3 | 2 |
| はつ雪 | 1 | - | - | 2 | - | 2 | 1 |
| 霧 | 1 | - | 1 | 4 | - | 4 | 2 |
| 炭賣 | 1 | - | 2 | 2 | 1 | 3 | 3 |
| 霜月 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 計 | 5 | 1 | 6 | 12 | 2 | 13 | 13 |
| 追加(6句) | / | / | 1 | 1 | - | 1 | 1 |

(-:該当無し, /:当該欄無関係)

を加えてもこれらのことは変わらない。

第5表に大気現象を含む句について、作者別に長句・短句を区別して集計した結果を示す。同数

作句している主要メンバーについてみると、5巻すべてに大気現象を出したものはいない。荷兮がはつ雪の巻、杜国が木枯しの巻を除く4巻で大気

第5表 作者別、大気現象を含む句の長・短句別句数

| | 芭蕉 | 野水 | 荷兮 | 重五 | 杜国 | 正平 | 羽笠 |
|--------|----------|----------|----------|---------|----------|----|---------|
| こがらし | L 2, - | - , S 1 | L 1, - | - , S 1 | - | - | / |
| はつ雪 | - | L 1, - | - | - | L 1, S 1 | - | / |
| 霧 | L 1, - | - | L 2, - | - , S 2 | L 1, - | - | / |
| 炭 賣 | L 1, S 1 | - | - , S 1 | - | L 2, S 1 | / | - |
| 霜 月 | - | L 1, - | - , S 1 | - , S 2 | - , S 1 | / | - , S 1 |
| 計 | L 4, S 1 | L 2, S 1 | L 3, S 2 | - , S 5 | L 4, S 3 | - | - , S 1 |
| 追加(6句) | - | - | - | - | - , S | / | L, - |

(L:長句, S:短句)
(-:該当無し, /:当該欄無関係)

第6表 作者別、大気現象を含む句の季

| | 芭蕉 | 野水 | 荷兮 | 重五 | 杜国 | 正平 | 羽笠 | | |
|--------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|-------|--------|-------|
| こがらし | W 2, - | - , H | W, - | - , H | - | - | / | | |
| はつ雪 | - | W, - | - | - | W, F | - | / | | |
| 霧 | H, - | - | FW, - | - , W 2 | W, - | - | / | | |
| 炭 賣 | F, H | - | - , W | - | WH, Z | / | - | | |
| 霜 月 | - | S, - | - , Z | - , F 2 | - , H | / | - , W | | |
| 追加(6句) | - | - | - | - | - , H | / | W, | 計 | |
| 季別計 | 春 [F] | 1, - | - , - | 1, - | - , 2 | - , 1 | /, / | - , - | 2, 3 |
| | 夏 [S] | - , - | 1, - | - , - | - , - | - , - | /, / | - , - | 1, - |
| | 秋 [H] | 1, 1 | - , 1 | - , - | - , 1 | 1, 2 | /, / | - , - | 2, 5 |
| | 冬 [W] | 2, - | 1, - | 2, 1 | - , 2 | 3, - | /, / | 1, 1 | 9, 4 |
| | 雑 [Z] | - , - | - , - | - , 1 | - , - | - , 1 | /, / | - , - | - , 2 |
| 計 | 4, 1 | 2, 1 | 3, 2 | - , 5 | 4, 4 | /, / | 1, 1 | 14, 14 | |

(F:春, S:夏, H:秋, W:冬, Z:雑, 各欄左長句, 右短句)
(-:該当無し, /:当該欄無関係)

現象を出している。また、野水が3句と少ないこと、杜国は追加を含めると8句と多いこと、芭蕉が長句、重五が短句に偏っていることが目立つ。

第6表は、巻ごと及び追加について、作者別に長句・短句別に季を示したものである。主要メンバーを比較すると、大気現象の句数が少ない野水が全巻を通じて大気現象を含む句が1句しかない夏を出していること、荷兮が秋に大気現象を出していないことに気づく。また、冬の場合は大気現象を含む句に長句が多いが、春、秋では短句が多い。

5. おわりに

一つ一つの気象現象については第3節で述べたが、ここでは各歌仙にまたがった興味ある点を挙げる。

「こがらし」の巻の発句における「こがらし」は、一般的な価値基準からは否定的なイメージで使われており、現在の木枯しのイメージとは離れていない。しかし、脇の句におけるイメージ、あるいは冒頭の発句に対応させた最終巻「霜月の巻」の挙句では肯定的なものとなっている。これが作者である芭蕉に対する尊敬の念の表現であるのか、当時の一般的な木枯しのイメージに肯定的な部分があったのか、なお検討を要する。

「はつ雪」の巻の発句、「霽」の巻第25句、「霜月の巻」第34句では雪に対して否定的な意味を与えていない。『冬の日』の作者達は、降・積雪の少ない太平洋沿岸地域の住人ではあったが、歌仙に親しむような階層は雪で苦勞することはないという背景も無視できないであろう。

『冬の日』では気温表現が少なく、「こがらし」の巻第11句、「霽」の巻第24句、「炭売」の巻の脇

の3句に寒さが出てくるだけである。いずれも貧困などに関連している。

本文のような形で連句のなかの大気現象について考察を加えるに際して、残されていることは、必ずいずれかの季でなくてはならない発句における大気現象の役割である。『冬の日』でははじめの3巻の発句に大気現象がはいっており、『猿蓑』では4歌仙のうち2歌仙が大気現象を含む句が発句である。また、花、月の定座、及び恋の句など連句の決まりと大気現象の関係の有無も確認すべき課題である。

本文を、お茶の水女子大学で33回目『春の日』を迎えられると同時に御退官となられる式 正英先生に捧げる。当面、地理学的とは見えない文章であるが、御容赦賜れば幸いである。

参考文献

- 安東次男 (1981) : 『連句入門 蕉風俳諧の構造』 筑摩書房, 306ページ。
 ——— (1986) : 『風狂始末 芭蕉連句新釈』 筑摩書房, 287ページ。
 ——— (1989) : 『続風狂始末 芭蕉連句新釈』 筑摩書房, 216ページ。
 ——— (1990) : 『風狂余韻 芭蕉連句新釈』 筑摩書房, 216ページ。
 白石梯三・上野洋三 (1990) : 『芭蕉七部集』 岩波書店 (新日本文学大系70), 650+49ページ。
 田宮兵衛 (1990) : 『猿蓑』の連句における大気現象について。お茶の水地理, 第31号, 9-15。
 中村俊定 (1962) : 連句篇。大谷篤藏・中村俊定校注 『芭蕉句集』 岩波書店 (日本古典文学大系45), 282-517。

Weather in "HUYU-NO-HI"
 Hyoe TAMIYA